
イクスティンクト・スピーシーズ

たかしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イクスティンクト・スピーシーズ

【Nコード】

N6456C

【作者名】

たかしー

【あらすじ】

核戦争によりほとんどが滅んでしまった近未来の地球。生き残った少数の人々は残った物資で日本近海に巨大都市“メトロポリス”を建設する。人類最後の砦となった“メトロポリス”は戦争避難民で溢れ返っていた。だが安住の地であったはずの“メトロポリス”に謎のウイルス“T-O-B”が襲う。感染した人々は次々と形を変え人々を襲っていくのであった。

プロローグ

—2010年9月—
15人の越冬隊が過ごすアメリカの南極観測隊基地より異常事態の通告が発令される。

—2011年1月—
次年の越冬隊が到着、
異常事態を通告した15人全員の変形死体が発見される。

—2011年3月—
アメリカ国家命令により比較的損傷が少ないジョン・ホッパー医師の遺体を残し、
他14人の変形死体が焼却処分される。

—2011年7月—
冷凍保存されていたジョン・ホッパー医師の遺体の解剖がニューヨークで始まる。
しかしこの怪事件の原因を突き止められず、
この事件は国家機密に。
ホッパー医師の遺体の永久に冷凍保存される事が決まる。

—2023年1月—
アラブの反政府集団“ダッブール”が大陸間弾道ミサイルをアメリカのワシントン州に2機発射。
これによりカリフォルニア州が首都となり、
アラブ諸国とアメリカの間で戦争の危機が始まる。

—2025年1月—

北朝鮮よりアメリカに向け核ミサイルが発射される。

撃墜に成功するがその破壊力によりアメリカ東部が壊滅する。

シルヴェスター・R・バルボア大統領はアラブ諸国を含めたアジア
敵対国へ全面戦争を宣言。

アメリカが北朝鮮に向け核ミサイルを発射。

ピョンヤンが壊滅。

ー2025年9月ー

“ダブブル”がカリフォルニア州で大規模テロを強行し10万人
が死亡。

世界的な戦争が発生する。

ー2029冬ー

核被害を恐れた日本が太平洋上近海に超巨大人工都市“メトロポリ
ス”の建設を始める。

ー2033年8月ー

アメリカの同盟国であるイギリス、フランス、イタリアの軍が次々
と降参、

事実上アメリカの敗戦となり全世界がアラブ、朝鮮民族の領土とな
る。

ー2034年ー

同盟国のレジスタンス組織がニューヨークで眼球が破裂し背骨が飛
び出ながらも生きる中年男性を発見する。

しかしその男は間もなく死亡し死体はドイツへ送られる。

ー2035年6月ー

ドイツのロベルト・フレクスナー教授がこの遺体からエボラ出血熱
とよく似た新型ウイルス“T-O-B（通称…血の涙）”を発見し培

養に成功。

レジスタンス組織は細菌兵器の開発としてネズミで動物実験を開始する。

感染症の被害のようになる事を実証する。

—2035年8月—

動物実験に使われたネズミが中型犬のサイズに巨大化、実験員達を襲い始める。

危険を感じたフレキシナー教授は研究所と資料と共に焼身自殺をする。

—2035年10月—

レジスタンス組織の1人、ジェームズ・コナーが実験当初の資料のコピーと培養された“T-O-B”を発見。

“T-O-B”のミサイルを開発し敵対国へ発射。
敵対国は壊滅する。

—2036年2月—

ジェームズ・コナーがレジスタンス組織の指揮者、イアン・マッカーシーを殺害。

ジェームズ・コナーはその場で射殺されるが、その事件に続き次々と殺人が発生。

内部の混乱によりレジスタンス組織が壊滅する。

また敵対国でも同様の被害が発生、世界中で多くの難民が生まれる。

—2036年5月—

それらすべての原因が“T-O-B”である事が新たな実験により解明する。

しかし感染ルートを解明出来ず、

ワクチンや予防薬も完成させられないため、
唯一戦争の被害が無く感染情報の無い完成直前の“メトロポリス”
に多くの難民が駆け込み始める…

第1話…終焉

今は私の心の父ジーザスが生まれて24427ヶ月、つまり北半球の季節は夏のはずだ。

だが地面はまるで氷のように冷たく、風はまるで孤独をより一層深めるかのように冷たかった。

まわりを見渡すと黒い雨の中に雪のようなモノが降っていた。

その雪は放射能を含んだ瓦礫のくずで、

科学者が言ういわゆる“死の灰”だ。

死の灰は太陽の光をほぼ遮り、

所々から見える木漏れ日のような光には暖かさは無い。

そしてやっと気がついた。

地球に核の冬が訪れ、

破滅に向かっている。

人類は何も学習が出来なかった。

『暴力は暴力を』

結局人類は警告も聞かず自ら死を選んだ。

何も知らない幼児たちは、すべてを知り始める最中に死んだ。

皆死ぬ事なんて知らなかった。

むしろ死んだ事さえも知らなかっただろう。

その死体は跡形も無く吹き飛び、焼け焦げてしまっているからだ。

生きていても皮膚がケロイド状のグチャグチャの状態になり、いずれ死ぬのだろう。

もちろん生き残った人間たちも大勢いる。

だが彼は服も食べ物も生活するものすべてを残りもので生きている。

灰の雪はその核被害の人々をあざ笑うかのように降っていた。

そして波の音がした。

見てみると海にも死体が浮いていた。

浜辺には何千何万と死体が打ち上げられていた。

やけに静かで、孤独な浜辺だった。

しばらく経つと、

静かな世界に海を裂くモーター音が響きわたった。

音の方向を見ると、

雪の中から数え切れないほど多くの核被害用に改良された船の連隊がいた。

一番先頭の船が後ろの航行している船の乗員たちに合図を送った。すると先頭の船から銀色の発光弾が飛び出した。

少し経つと金属が擦れるような爆音が響き始めた。

そして右を向いた。

そこから1マイルほど先に、

いままで見た事が無いほど大きな鉄くずがあった。

その鉄くずは“メトロポリス”。

そう呼ばれる場所だそうだ。

第2話：Laknoff連隊

広い大海原。

遠くには“メトロポリス”が見れる。

ノイズが聞こえ、

一番先頭を走る船“ライノフLaknoff号”の無線が音声をキャッチした。

『こちら“メトロポリス”監視塔。』

船を操縦しているウィルバー船長にかわり、
となりに座っている女性が無線機をとった。

『こちら“メトロポリス”監視塔。そちらは？』

「こちらLaknoff号。我々の入国を許可させてもらいたい。」

『数は？』

「125人。」

『国は？』

「アメリカです。」

『感染被害は？』

「今のところ報告はない。」

女性がやりとりをしている間、
連隊の右端の船に動きがあり、
猛スピードでメトロポリスに進んでいった。

『待て！まだ入れると許可はしていないぞ！』

監視塔の職員が声を荒げ始めた。

「クソッ！エヴリン、無線を！」

職員の異変に気がついたウィルバー船長はすぐさま女船員からマイクを奪い取り、
走り出した船、“dv…FISH号”に連絡をとった。

「dv…FISH！dv…FISH！こちらLaknoff！止まるんだ！」

『おい！襲撃するつもりか！』

ウィルバー船長は無線をかえた。

「待て！話を聞いてくれ！」

“メトロポリス”、

こちらLaknoff号のウィルバーだ！

我々は善良なるアメリカ市民だ！

断じて襲撃ではない！」

『じゃああの船は！？』

そう話している間にもdv…FISH号は“メトロポリス”へ0.4マイルまで近づいた。

「クソ！」

エヴリン、“メトロポリス”との交信でdv…FISHにこっちの無線がつながっていない！

そっちの無線からdv…FISHにつなげてくれ！」

「わかりました、船長。」

『ぶつかるぞ…』

女船員がd v…F I S H号に周波数を合わせた。

すると激しいノイズが聞こえ、

その後に鉄を擦るような音になった。

そして。

『た…！…助けてくれ！かいぶ…』

d v…F I S H号は強い火柱を上げ、

その火は“メトロポリス”に引火し始めた。

火は“メトロポリス”の大きさに比べかすかのモノであるが煙はキノコのように変形していった。

“メトロポリス”からまた轟音が聞こえた。
きつと攻撃の音だ。

そして“メトロポリス”から無線が入った。

『もう一度聞く、襲撃か？』

「違う！信じてくれ！」

『…。』

ウィルバー船長は汗をかいていた。

大勢の命を守る為に自らこの5万6000人を指揮し、

火の海になった故郷のロサンゼルスのレストランから抜け出した。
その努力、自分の誉れが水の泡になってしまいかもしれない。

ウィルバー船長は焦っていた。

30秒ほど経つと“メトロポリス”から連絡が入った。

『わかった、信じよう。』

君の船が“メトロポリス”から100ヤードの距離に近づいたら一隻ずつ私の指示に従い一隻ずつ“メトロポリス”に入るんだ。』

「わかった…」

ウィルバー船長は“メトロポリス”の屋上にあるミサイルの砲口を見た。

その砲口は無数にあり、

ウィルバー船長のLaknoff号、

そしてLaknoff号に続く連隊50隻に標準をあわせていた。

もし攻撃されたとしたらほぼすべての船が破壊されてしまう事は間違いない。

Laknoff号とLaknoff号に続く連隊が“メトロポリス”まで100ヤード以内に近づき止まった。
すると“メトロポリス”から無線が入った。

『今から門を開ける。

一隻ずつ入ってくるんだ。』

その指示を聞いたLaknoff号は一隻だけ前に出た。

次の瞬間、

Laknoff号が“メトロポリス”のライトによって光につつまれた。

と同時にまるで“メトロポリス”全体にヒビが入ったかのような大きな音がした。

すると、

Laknoff号の正面からまわりの光よりはるかに眩しい閃光のような光が見え始めた。

その光はこの薄暗い海を遠くまで照らしてしまうほど眩しかった。しかしすぐに光の中が鮮明に見えてきた。

それは無数の、

ウィルバー船長の連隊を出迎える作業員達であつた。

そしてL a k n o f f号は、

今まさに“メトロポリス”入ろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6456c/>

イクスティンクト・スピーシーズ

2010年10月11日14時09分発行